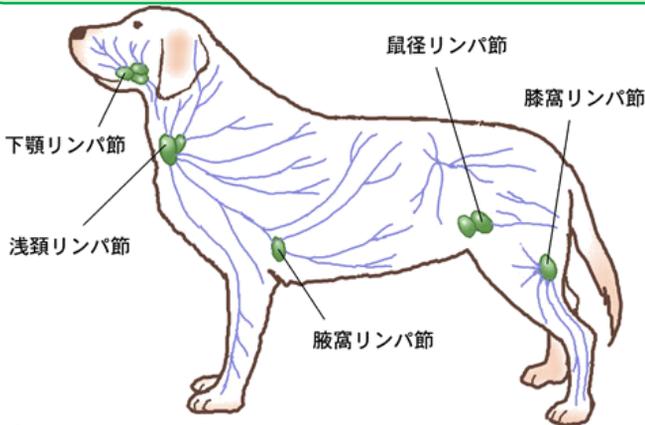


犬のリンパ腫とは

リンパ節や肝臓、脾臓などの臓器に発生するリンパ性の悪性腫瘍です。様々な分類があり、それぞれ症状や治療方法が異なります。犬で最も多いのは多中心型で、縦隔型は稀とされます。

《リンパ腫の分類と症状》

- ① 多中心型
→ 体表リンパ節(下図)が腫れる。腫れ以外の症状は出にくいですが、首周囲のリンパ節が過度に大きくなると呼吸困難を生じることがあります。
- ② 縦隔型
→ 左右の肺の間にある縦隔リンパ節や胸腺が腫瘍化したもの。胸水貯留により呼吸が苦しくなります。
- ③ 消化器型
→ 腸に腫瘍塊ができたり、塊を作らず広がったりすることもある。下痢や嘔吐などの消化器症状を主とし、対症療法でなかなか治まらないことがあります。
- ④ 皮膚型
→ 口唇や体の皮膚に発生する。皮膚炎と見た目が似ており鑑別が難しいことがあります。(下写真)
- ⑤ 節外型
→ ①～④以外で、肝臓や脾臓、腎臓、中枢神経系、眼などにできるリンパ腫。



《治療》

◆ 化学療法(抗がん剤)

リンパ腫は病変が限局せず広がりやすい性質があります。そのため全身的に作用する抗がん剤が治療の中心となります。しかしながら完治は難しく適切な治療でがんを抑えた(寛解)としても再発することが多いです。そのため、まずは寛解をゴールに、そしてその状態をなるべく維持することが目的となります。腫瘍の分類(種類・ステージ・由来細胞など)や本人の状態によって薬の種類、周期などの組み合わせが異なります。ステロイド剤を併用することが多いです。

◆ 外科療法

多中心型リンパ腫で、大きくなり過ぎたリンパ節が気管を圧迫する場合などに大きくなったリンパ節を切除する方法が取られます。しかしながらすぐにまた別のリンパ節が腫脹し、一時しのぎにしかならないこともあります。

◆ 放射線療法

縦隔型や、限局した皮膚型などで選択されることがあります。施設を備えた病院に限られること、毎回全身麻酔が必要になること、中～長期の入院が必要になることなどのデメリットがあります。

◆ 緩和療法

本人の状態などにより上記の治療を選択できない場合などに、ステロイド剤単体での治療や支持療法(点滴、対症療法など)で本人の苦痛やだるさなどを緩和します。